

なさいと返答した。少佐はわかりましたと帰った。少佐はパッチをつけませんでした。少佐は新潟県出身です。独歩の大隊長でした。一時は皆動揺したけれど、間もなく平穩にもどりました。

二千人を乗せた栄豊丸は無事静かに舞鶴湾に到着しました。錨をおろしました。すぐにも上陸したいのにいろいろの事情で一晩船の中に泊められました。実に長い一晩になりました。十二月二日の夜でした。

唄「岸壁の母」で有名な桟橋に三日朝足取りも軽く一列に並んで上陸しました。十年ぶりに見る内地の娘たち、モンベ姿の黒髪が連発するご苦労さまでしたの声に感激、歓喜の桟橋でした。

### 【執筆者の紹介】

現住所 新潟県新潟田市小戸一二〇四  
本籍地 新潟県新潟田市小戸一二〇四  
生年月日 大正九年二月二十五日  
入 隊 昭和二十年三月九日

松風不朽一二三師団歩兵第二六九連隊

終戦時の居住地 満州北孫吳南花台陣地

入ソ日 昭和二十年九月一日

抑留地 パーム、チタ、コムソモリスク

作業 伐採、鉄道、道路、建築、機械、農業

引揚 昭和二十四年十二月四日

引揚船 栄豊丸

上陸地 舞鶴

(新潟県 吉田 忍)

## 地獄のシベリア強制抑留

東京都 鳴崎 武男

### 一、はじめに

第二次世界大戦(太平洋戦争)に従軍し、終戦とともにシベリアで虜囚の生活を送りながらも、幸いに生き残ることができた。

この戦争初頭、アッツ島に米軍と対峙して玉砕した戦友たち、南方戦線の怒濤の中、藻屑と消えた戦友た

ち、沖繩戦線の激闘で散華した戦友たち、あるいは北方のソ満国境で苦闘の果て露と消えた戦友たち、戦後捕らわれてシベリアの奥地で無念のうちに帰らぬ人となった戦友たち、特に北方辺境の地シベリアで苦難の中に果てていった仲間たちは、皆関東軍の一員として勇躍戦場に赴き、純粹に祖国の繁栄を祈って戦った。

戦争は罪悪であることを知りながら人間はいまだに争いを繰り返している。戦争がいかに悲惨なものであり、犠牲が大きく、いかに無意味なものであるかを後世に伝えたい。戦争は常に当事国双方の為政者に責任がある。そして常に戦わされる双方の国民が犠牲になるのだ。帰らぬ戦友たちは、皆明日の日本の平和な社会を夢見て戦い散華したのである。その心情を訴え、この小文が英霊たちの鎮魂のよすがになればと念じつつ、この悲劇の思い出を記録して帰らぬ人たちに捧げる。日本は今後とも「戦争」は絶対に起こしてはならない。平和の限らない祈りをこめて。

## 二、日ソ開戦

昭和二十年に入ると、関東軍の将兵の大半が、日本

の最後の戦場である沖繩戦線へ送られて行った。ところがこれを待っていたかのように二十年八月九日、突如としてソ連邦は日本との不可侵条約を一方的に破棄し、ソ満国境から怒濤のごとく侵入し、ここに日ソ戦が開幕した。我が軍はソ満国境でソ連軍と対したが、数日で終戦となった。国境にいた最前線の将兵はとにかく、後方にいた我々は、ほとんど戦わずして敗戦の憂き目を味わうことになった。このころ関東軍の主力は南方戦線及び沖繩戦線にあって既に潰滅の状態にあった。数十倍のソ連軍の突然の侵入と終戦詔勅の喚発に、将兵はなすすべがなかった。

そのころには既に、終戦の詔勅が放送されたことは、全満州の都市の満州国人や朝鮮人たちには知れわたっていた。「日本は戦争に負けた、もう日本人の言うことを聞くことはない、今までおれたちは日本人にいじめられていたんだ。」街中にこんな声飛び交い、あちこちの日本人の家が襲撃されたとうわさが頻々と伝えられた。また満州国軍の一部の軍人が混乱を起こしたことも伝わってきた。戦うこともできず、在留邦

人を保護することもできないことは、実に情けなくまた歯がゆいことだった。今は最も危険な外国となってしまった満州国に、それまで何の不安もなく在留していた日本人の不安と絶望は、筆舌に尽くせぬものだったろう。襲撃を受けてもこれに対抗する手段を失ってしまった在留邦人は、女性は皆断髪し、顔にすずを塗り、男装して暴行を逃れたが、略奪を防ぐことはできなかった。

### 三、終戦を知らなかった前線

混乱の真ただ中であって、武器を持ち出して防衛することもできず上官から「たとえどのようなことが起こっても、今はただ戦争を終わらせることが天皇詔勅の本旨である。したがって武装を解くことが日本を救う道になる」と論され、なすところなく、指示に従うより仕方がなかった。一方ソ満国境最前線の山中では、いまだ終戦の詔勅を知らず戦闘中であつた。「ソ連軍」が群がり、山中の友軍に終戦を知らせる方法はなかった。これらの将兵は、優勢なソ連軍の砲火に追われて山中に立てこもり、弾薬は尽き果て補給はなく、

昼はタコつぼに隠れ、夜は斬り込み戦のほか戦術はなく玉碎して行ったという。

いづどこで暴動が起こるかかわからず、日本人への報復の危機をいっばいにはらんでいた。しかしもし戦えば、すべての在留邦人がどんな運命になるかは目に見えていた。激情に駆られて引き金を引くことは、敢に慎まなければならぬのだ。多くの在留邦人のためには、武装を解いて武器をソ連軍に渡さざるを得ない状況であつた。涙をのんで部隊長の指示に従い、九月二日、部隊は「ハルビン」ですべての武器をソ連軍に渡した。しかしそれは、いかに弁解しようとも、無条件降服に外ならなかった。その後はソ連軍の監視下に入る事になった。

### 四、ハルビンより海林まで苦難の行軍

昭和二十年九月二日、すべての武器をソ連軍に渡してから我々は、それぞれ「自分は捕虜になったのではない。これから日本に帰って祖国の復興に尽くすのだ」と、本気で自分に言い聞かせた。しかし現実はその甘んないものではないことを、しだいに悟らされて

いった。九月二十日、周囲をソ連兵の銃に囲まれて、衣類と食糧を持てる限り携え、ハルピンを後に牡丹江へ向かい出発した。ソ連側は通訳を通じ、「今日日本は非常に困っている。東京は焼け野原になっており、君たちの帰るのを待っている。これから牡丹江まで行き、そこから列車で朝鮮の元山に出て、そこから船で日本に帰る」という。このように言われると、ソ連兵に監視されながら歩くこの集団から、逃亡しようとする者は一人もいなかった。日本に帰すというのは逃亡を防ぐ巧妙なうそだった。

それは後でわかった。我々は日本に帰れると信じてただ黙々と歩いた。どんなに疲れても、とにかく帰れると思って歩いた。集団から離れるとたちまち敵意をもった住民たちが、襲撃してくることは目に見えている。四囲は皆敵なのだ。ここで落伍することは死ぬことと思わなければならない。崩れようとする気持ちにむち打って歩き続けた。持ってきた食糧は次第に残り少なくなり、ほとんどの人は食い尽くしてしまった。後は携行した衣類を、近寄って来る満人農夫と食糧に

交換して食いつないだ。みんな疲労は極限に近く、日増しに落伍する者が出てきた。歩きながら考える。ここはどこだろう。もう牡丹江に近い山岳地帯に入っているようだ。あちこちの山中から散発的に銃声が聞こえる。まだ戦闘を続けている戦友たちがいる。戦争は終結したことを知らせないだろうか。ソ連兵の銃に囲まれて、武器を持っていない我々にはどうすることもできない。この地帯では激戦の傷跡がまだ生々しい。戦死した戦友の死臭が暑い風に乗って鼻をつく。遺体の収容もできぬまま、強い大陸の日差しで既に腐敗してしまっていた。見えない遺体に心で手を合わせ通り過ぎるより仕方がなかった。

最も悲惨だったのは、当時国策として満州に入植した満蒙開拓団の家族たちであろう。ソ連軍に追われ、敵意をもった住民に襲撃され、全員自決して果てた集団もいたという。山越えの山中で、明らかに暴行を受けた後、殺害されたとみられる日本人女性の半裸の遺体を見てしまった。ソ連兵の銃に遮られて、そのまま通過せざるを得なかった。なんとも情けない心情で

あつた。

#### 五、海林にたどり着く

ようやくにして牡丹江の手の海林に着いた。ぐったりとして体を投げ出し、寝転んだまま脳裏に浮かんだのは、途中まで一緒に一生懸命歩いてきた親子のこと。手を貸すこともできなかったが、無事にたどり着くことができたであろうか。しかしよくも歩いたものだ。今日は十月五日だ。何とハルピンを出てから十五日も歩いたことになる。「ダワイ、ダワイ」と無情なソ連兵の銃に追い立てられ、忘れられない十五日間の荒野の死の行軍だった。どんなに疲れても、落伍すると死が待っている。疲労こんぱいの極限の中で、そのことだけが頭にこびりついていて両足の筋肉を動かした。しかしついに海林に着いた。もう少しで列車に乗れるだろう。あの山中で犠牲になった戦友たち。一緒に一生懸命歩いてきたあの子供たち、母親はどうなったであろうか。苦しさに負けてしまいそう自分の気持ちを抱き締めることだけで精いっぱいであった。落ちて着くにつれて頭の中に行軍中の、もろもろの思い出が

次々によみがえってくる。しかしこれで何とか帰れるのだ。私は心の中に本当に帰れるのだろうか、どうしても残る疑惑を振り払うようにしながら、この時点ではまだ祖国に帰れると思っていた。

#### 六、異国の丘シベリアに抑留

昭和二十年九月二十日、ハルピンを出発して苦難の行軍の末、十五日目の十月五日、ようやくたどり着いた海林で、千人単位の集団に編成され、列車に乗せられた。「あなたたちはここから牡丹江を経由し、朝鮮の元山に出て、そこから船で日本に帰る。早く帰って日本の復興をしなければならない。」という、ソ連側通訳のまことしやかな言葉を信じて、我々はその夜海林を出発したのである。ところが、牡丹江から朝鮮の元山へ向かうはずの列車（貨車）が、南へ走らず北に向かって走っていることに、翌々日になって皆気づいた。

今度はソ連側は「あなたたちはウラジオストクから日本に帰る」と言ってきた。しかしこれももうそだった。我々の乗せられた貨車は、シベリア鉄道へ出て、

ウスリースクからウラジオストックの方向である南へ走らず、北のハバロスクの方角へ向かって走っていた。そのころはもう貨車には外から鍵がかけられ、自由に外へは出られなくなっていた。もう我々もソ連が敗戦の日本兵を、日本に帰す意志のないことを悟っていた。考えてみれば、戦った相手の日本軍をそのまま放免するはずがないではないか。我々の認識が甘かったのだ。ソ連側は途中列車からの逃亡を防ごうとするためか、徹頭徹尾我々をだまし続けた。列車はいつの間にはハバロフスクに着いていた。極寒の十一月であった。貨車の中になれるが敷いた上に石油の空き缶を置き、それで薪を燃やして暖をとった。皆すすで顔がどす黒くなっていた。列車は不思議に昼間は駅で停車して動かず、夜になると走った。

これも夜停車したときの逃亡を警戒したのであろう。我々は昼間の停車中に、一斉にあちこちで大小の生理的排泄を行った。これをみんな尻をまくって意気張る弁天小僧菊之助だと大笑いした。また列車の停車中は食事づくりの時間であった。配給のわずかなグリーン

ピースあるいは大豆を、岩塩で味をつけ、飯ごうで丹念に煮て、中身よりお湯の方が多い食事で腹を満たした。昼間はソ連兵が厳しく監視していたが、このころは、我々はまだもう日本に帰れないと諦めて、逃亡など考える者はだれもいなかった。

#### 七、死の雪中行軍

貨車は果てしない雪原をさらに西に走り、やがてイズベストコーワヤの駅に着いた。我々は全員ここで降ろされ、そこから見渡す限り銀世界の荒野を、さらに北へ北へと、ソ連兵のマンドリン銃で小突かれ小突かれ、ダワイダワイと追い立てられて行った。飢えと寒さにさいなまされ、昼夜の別なくハルピンから海林まで歩かされた行進よりも、さらに苛酷な雪中行進であった。南方戦線で日本軍が緒戦で優勢のところ、フィリピン戦線で米軍捕虜を酷暑の中で行軍させたという「パターン死の行軍」と非難されたが、我々に科せられた行進こそ、それを越えるまさに雪中死の行進であった。敗戦国の軍隊の惨めさを、骨の髄まで知らされたことである。海林を出発するとき千人単位で編成

されていた隊員は、皆疲労の極限にきており、落伍者は増えるばかりであった。この地域ではシベリア狼の群が数多く徘徊していた。夜行性の彼らは時には牛や馬をも襲うどう猛なもので、もし隊から落伍すればその餌食となる恐れがあった。今も、あのとき力尽き涙をのんで落伍していった人たちのことを思うと、身も凍る恐ろしさで悲しさが込み上げてくる。

#### 八、テルマ収容所

苦難の年の暮れ、昭和二十年十二月二日、我々は最初の収容所テルマに着いた。このとき皆体力は消耗しきっていて、ペーチカの薪を拾いに行くのがやっとだった。ソ連側もこんな状態は承知していて、しばらくは作業をさせなかった。ここで食わされたのは、かつて関東軍の軍馬の飼料だった。皮かぶりのコウリヤン、カチカチに乾燥したトウモロコシ、それはどんなに煮ても軟らかくならない。しかも給付されるのはほんの一握りの量であった。それを一さじの岩塩で味をつけ、飯ごう一杯にお湯を足して増やし「スープ」と称して腹に流し込んだ。しかしそれは食後しばらくす

ると、皆小便になって出てしまい、いつも腹は空っぽだった。皆食べ物の話をして楽しんだ。うまいものを腹いっぱい食うことだけが一番の欲求だった。ソ連側は、我々が落ち着きを取り戻してくると、次第に労働を割り当ててきた。薪運搬、家屋修理、伐採、木材搬出、製材など次第に労働は苛酷になっていった。私も最初は伐採をやらされた。外套（シューパー）を着ての雪の山での作業は重労働だった。

#### 九、モンカ収容所でのノルマ

私はこのテルマに三か月いて、翌年二月、さらに奥地のモンカに送られた。ここが私の今後三年間の収容所生活を送る地となった。この地域の冬季の平均気温は、摂氏零下五十度という極寒の地だった。ほとんどの者が、伐採、搬出、製材の三種類の重労働を割り当てられ、それぞれにノルマを課された。ところが私はここでは幸運にも、大学工学部に籍があったということで、マシーニスト（エンジニア）ということで、製材所の機械工として配置された。しかし仕事はエンジニアが笑い出すような単純な仕事だった。それは丸の

こぎりのシャフトの軸受けベアリングの加熱を防ぐため、軸受けに詰まるオガクズを取り除き、ベアリングを洗浄し、グリスを給油する仕事。一日に何回となく切れてしまう。動力伝導ベルトの緊急接続修理の仕事。また丸のこぎりの前を矢のように往復する原木保持機、これの伝導ワイヤーがたびたび切断するので、伝導ワイヤーの緊急交換修理の仕事など。次々に起こる種々の故障を迅速に修理して、製材ノルマに影響させないようにするのが私の担当任務であった。他の製材要員たちは故障が起これば休めるので喜ぶが、私は故障が起これば一分でも早く修理しなければならなかった。零下五十度の極寒の中で、素手で修理することは大変な仕事であった。しかし他の人たちの作業はもっと厳しいものだった。伐採の仕事に当たった人たちの中には、重い防寒外套を着ての作業は機敏に動くことができず、倒木を避けきれず下敷きになって死んだ人もいた。搬出作業に当たった仲間の中には、山からの材木の馬力運搬の搬出作業で、転落死してしまった人もいた。こんな重労働をしながらの食事が、干からびたト

ウモロコシや皮かぶりのコーリャンでは、弱り切った胃が受け付けるはずがなく、皆ひどい下痢に苦しめられた。

#### 十、生と死の境

激しい下痢の結果、極端な栄養失調になった戦友たちは、次々に息を引き取っていった。グッタリと疲れて空腹に悩みながら、だれもが何とかして生きることだけを考えながら眠った。しかし生きる希望を失って首を吊り、みずから命を絶った人もいた。突然夜中に起き上がり「はら船が来ているじゃないか。早く行かないと乗り遅れるぞ」と極寒の戸外にはだして飛び出した彼は、とうとう発狂して間もなく死んだ。シベリアの冬は厳しい。野も丘も道路も、氷と雪に閉ざされて交通は途絶する。

収容所の食糧はシベリア鉄道沿線からのトラック輸送に頼っているもので、輸送が途絶すると大変なことになるのである。毎年この時期に交通の途絶に苦しめられていた。今度も交通が途絶えた。冬は草もない木の芽もない。シベリアエゾ松の大木の幹を食いながら、



幹の中で越冬している髪切り虫の幼虫をとり、これを串にさして焼いて食うのが何よりのごちそうだった。またエゾ松の幹にはりついている黒いこけも食べた。ソ連人の捨てた魚の頭しっぽ、これを拾ってまだ食えるものは手当たり次第食った。恥も外聞もない人間の極限の姿だったろう。理性にとらわれれば何とも情けない姿である。仏教の言う飢餓道であらう。

シベリアは六月になると、日本の梅雨に似た雨がしとしと毎日降り続いた。この時期までにすべての氷結した川という川の氷、山野の雪が一斉に解けて合流して大洪水となる。

昨日までの荒野は泥沼と化し、道路という道路は水に浸り、またこの時期交通は完全に途絶えてしまう。食糧輸送はまた途切れて収容所はたちまち陸の孤島となってしまう。これから収容所は十日あるいは二十日食糧はなくなってしまう。わずかに生えてくる草は皆食った。小さい木の芽も食った。馬糞を拾って丹念に水に流し、中から出てくる消化していない麦を根気よく集め、これをソ連兵の捨てた缶詰の空き缶で炊い

て食べた。作業の往復は馬糞を探すのに皆眼を光らせた。早く夏が来てくれ。草が食える。昨日の朝は右隣に寝ていた友が死んだ。今朝は左隣の仲間が死んだ。こうして私は一体あと何日生きていられるだろうか。

#### 十一、月に祈る

収容所の二段ベットの上段と下段では、北極と南洋ほどの違いであった。部屋の真ん中でたく大きなペーチカ（暖炉）で暖められた空気は天井に上がってしまい、逆に冷えきった地面の冷気が部屋の床板を凍らせ、下段のベッド周辺の空気を冷やしてしまふからだ。

上段ベットでは暖かく寝られるが、下段ベットでは毛布を何枚重ねても、寒くて寝られたものでなかった。シベリアの夏は短い。九月半ばには白銀の世界になる。シベリアの雪は上から降るのではなく、大地に冷やされた大気の水分が雪になる。酷寒の大地に冷却される大気の水分は次々に氷結して霜状になり、見渡す限りの山野を白銀に埋め尽くしてしまう。シベリアの雪は下から降る。冬のシベリアの夜はよく澄んで、月がこうと輝いていた。照る月をふり仰ぎながら思った。

私はまだ生きている。我ながらおのれの生命力に驚く。人間はなかなか死なないものだ。いや死ねないものだ。西行は「嘆けとて月やは物を思はする」と歌ったが、私はこうこうと照る月を幾度か眺めながら年老いた父母はどうしているだろうか。またともにこの戦争に出席した兄はどうなっただろう。生死は、もの言いたげな月の光は、今日も故郷のあの山、あの川を照らしているであろうに、思いは尽きることがなかった。私は月に祈った「まだ元気でいてくれるなら、老いた父母に必ず伝えてほしい。私はまだ生きていることを」。しかし無念だが肉親の幸せを祈りながら私はやがてこの凍土の土となるだろう。

## 十二、幸運、帰国グループに入る

昭和二十三年六月、私はモシカの収容所で激しい下痢とともに血便が出た。ソ連人軍医は私を「赤痢」と誤診し、伝染を恐れて私を急遽テルマの病院に入院させた。しかし私は入院してから間もなく下痢も血便も止まった。今思えば下痢ではなく、大腸炎か何かではなかったか。私はまた奥地へ送り返されるものと覚悟

していた。ところが幸運にもこの時この病院で、病兵の帰国（ダモイ）の選考が行われた。そして何と私はこの選考で帰国者の中に入れられたのである。もしこの帰国の選考があと一週間遅かったら、恐らく私はまたモシカに送り返されて、あるいは二度と故国の土を踏めなかったかもしれない。運命の不思議さを痛感せずにはいられない。テルマを出発して帰国船の着くナホトカへ、浮き立つ気持ちがあった。日本へ帰れる。夢に見た日本へ、二度と生きて帰れるとは思ってもみなかった。

## 十三、ナホトカの日々

ナホトカには既に到着している帰国予定者たちが、収容所に入りきれずにあふれていた。日本側の引揚船が間に合わないのか、ソ連側が故意に配船の連絡を怠っているのかわからない。その間も我々は労働に駆り出された。もし船が着いたとき作業に出ていて乗船に間に合わなければ、後回しにされてしまう。ここまで来て船に乗るまで日本に帰れる保証はない。労働に出ている間、いつ船が来るか、後回しにされはすま

いかと気が気ではなかった。約一か月半乗船するまで安心できない日々であった。昭和二十三年八月十六日、私は船に乗れた。待ちに待った船に乗れた。とても生きて帰れまいと思っていたのに、私は終戦後三年目やっと帰国することができる。乗船することができたのだ。もう大丈夫だ、もう降ろされることはない。引き揚げ船上から故国日本の陸地を見て初めて「ああ、日本に帰れる」、心が宙に踊るような気になる。さらば、地獄のシベリアよ、万感胸に迫るようだ。運命に翻弄されて過ぎた六年の歳月、それは生涯忘れることはできない。

#### 十四、舞鶴上陸から五日市まで

親兄弟たちに早く会いたい、舞鶴上陸のいろいろな手続きの終了が待ち遠しかった。しかし間もなく自由の身になれると思うと、体が宙にあるようで心もとなかった。舞鶴から上野まで列車に揺られながら、六年前決戦を叫んで貨車に乗せられ、灯火をつけることも許されず、暗闇の中を完全武装で、黙々とこの東海道線を旅立ったあの日が思い出された。それにしても、

帰国上陸したときの日本の女性が余りにも美しく、余りにも艶やかに見えた。灰色の世界から突然竜宮に来た感じであった。シベリアでは「日本には今餓死者が道端に累々と転がっている」と、あれほど吹き込まれていた。今この女性たちはきれいな服装をしているが、食べるものはあるのだろうか、余りにも異なる現実には戸惑うばかりであった。我々がいかに隔絶された世界に置かれていたか、次第にわかってきた。今浦島になつてはじめて時流に気づいたのである。

車中シベリアにおける過ぎし日のことが、走馬灯のように浮かんでは消え、浮かんでは消えしているうちに、列車は上野駅に着いた。私はまず、辛うじて記録していた五日市の従兄弟の家に電話した。既に死んでしまったと思っていた人間からの突然の電話で従兄弟は仰天し、何度も何度も念を押していた。生家の肉親たちも皆元氣だという。私は胸を踊らせて上野から立川に出て、五日市に向かったのである。

#### 十五、故郷の山と川

五日市駅には、故郷の檜原から一族みんなが出迎え

てくれた。五日市から車を連れて檜原の生まれ育った家に向かった。二度と見ることはできないと思つていた山と川も、変わらぬ姿で私を迎えてくれた。この山をこの川をあのシベリアで白銀の山野をこうこうとして照らす月を仰いで何度しのことか。懐かしの我が家が着き、玄関を入ると母親が座って待っていた。「お母さん帰りました」私は声をかけた。しかし母親は何も言わずに、いや言えなかったのだらう。後から後から流れ出る涙をぬぐいもせず、顔中をクシヤクシヤにして、ただ黙つて私の体を一生懸命なでさすつていた。私もじつとしてなでるに任せた。「お母さん気の済むまでなでてくれ、死んだと思つていた我が子が生きて帰つたのだから」、だがこの母も今は亡い。聞けば母親は私のために、毎日陰膳を供えることを欠かさなかつたという。余りにも長かつた私のシベリア抑留の間に、既に父親も、すぐ上の兄もこの世の人ではなかつた。思えば私が電信第一連隊に入隊のとき、営門まで見送つてくれたのもこの父とこの兄であつた。目をつむるとその日の二人の姿がはうふつとしてまぶ

たに浮かんできた。万感胸に迫つて、私はしばし時の移るのを知らなかつた。

#### 十六、生き残つて考える

思いもよらぬ虜囚の生活を送り、地獄にも似た生死の境では、人間は教養も体裁もなくなることを知つた。ただ生き延びることだけしか頭になくなる。煩惱のなせる業か、これが仏教語でいう飢餓道なのだらうか。常に死と隣り合わせの状況の中で、不思議に生き延びた。これはただ苦しみに耐え抜いた自分の力だけではないことを生還した戦友たちは皆感じてゐるに違いない。これを単純に「運がよかつたんだ」と私は言い切れない。何か大きな不思議な力を思う。それにしてもあれほど憧れた故国の土を、不幸にも踏むことなく異国に果てた戦友を思うと、限りなく胸が痛む。英霊たちよ、どうか安らかに眠つてほしい。そして平和国家として立ち行く祖国を見守つてほしい。

#### 【執筆者の紹介】

生年月日 大正十年八月二十一日

出身地 東京都西多摩郡檜原村字神戸

現住所 立川市栄町三一五六―一七

最終学歴 昭和十六年九月三十日 繰り上げ卒業

応 召 昭和十七年三月召集により相模電信第一連

隊に入隊

転 属 昭和十七年十二月関東軍第一装甲列車隊

(第四三七〇部隊) 駐屯地ハルピンに転属

転 進 昭和二十年六月新京地区防空任務のためハ

イラル地区より転進

武装解除 昭和二十年九月二日ハルピンにてソ連軍に

より武装解除

強制抑留 昭和二十年十二月より二十三年八月までシ

ベリアに強制抑留される(陸軍伍長)

帰 国 昭和二十三年八月シベリア解放帰国す

静 養 昭和二十三年八月より同二十四年九月まで

生家で静養

再就職 昭和二十四年九月 立川飛行機株式会社に

再就職

退 社 昭和二十九年九月都合により同社を退社

就 職 昭和三十年三月大和運輸株式会社に就職

定年退職 昭和五十六年八月安全部長にて定年退職

継 続 昭和五十六年九月より六十二年九月までヤ

マト系列セントラルサービス株式会社取締役

役

〈地域活動〉

自 昭和二十五年四月

旭自治会長

至 同 二十六年三月

南栄会自治会長 兼

自 昭和五十五年四月

立川市自治会連合会副会長

至 同 六十年三月

立川地区防火指導部会長

自 昭和五十六年七月

立川市公民館運営審議委員

至 同 六十二年七月

立川市福祉協議会理事

自 昭和五十八年七月

至 同 六十二年七月

〈現 職〉

昭和六十年七月より

立川市青少年健全育成委員会  
栄町地区委員会議事

昭和六十一年三月より 栄町体育会相談役

昭和六十三年四月より 立川国立地区交通安全協会栄

支部総務

(東京都 石川 祐常)

## シベリア抑留の体験

新潟県 長谷川 元 美

山神府から孫呉の頃(終戦)

ソ連の参戦により、私達の部隊、特別補充下士官候補者教育隊(竹下部隊)は、ソ満国境の山神府を出て、後方の孫呉へ撤退することになった。

孫呉まであとわずかの地点まできたとき、そこは丁度ソング街道と広い軍用道路の交差点附近であった。

孫呉の司令部から伝令が来て、我が竹下部隊に対して将校を長とする二十四名の対戦車肉迫攻撃隊を編成せよと命令が下された。

それは敵ソ連軍の戦車二十四輛が、ソング街道を孫

呉に向かって進行中であるという情報が入ったからであった。

急造爆雷はおって届けるということである。部隊本部は、我が第三中隊にその肉迫攻撃隊の編成をせよと指示を出したのである。

広い道路上に中隊が二列横隊に並んで、いわゆる決死隊の志願を申し出るように達したのであるが、誰も言って出る者が無い。

そこで私達第一小隊長の田中大尉が、私の方を向いて、どうかと問われたので、出ないわけに行かなくなり、志願の意志表示をして一歩前へ出た。すると一人おいて隣りにいた門馬同年兵も前へ出た。その後、次から次へと三十名くらい、志願者が出たようだった。その中から二十四名の人選を中隊長と田中大尉が行った。

「長谷川は、孫呉の陣地へ入ったら、中隊の兵器係を担当しなければならないので、決死隊は駄目です。」と田中大尉から中隊長に話があって、私は決死隊の難を逃れた。